

『ロランの歌』における「怒り」の表現

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浅野, 幸生 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00000411

『ロランの歌』における「怒り」の表現

浅野 幸生

0.

武勲詩は中世フランスの叙事詩の代表であり、最も古く成立したジャンルの一つである。今日まで伝わるものは80編余りであるが、ここでコーパスとして用いる「ロランの歌」はその中で最も古く代表的な傑作として人口に膾炙している。成立年代は一異説はあるが一11世紀末と言われ、ここで採用したオクスフォード写本は1170年頃に書かれたとされる。

西ローマ帝国皇帝シャルルの甥で若き武将のロランを称える十音綴 (décasyllabe) 約4000行の韻文は、当時はヴィエルという弦楽器を片手にした遊行芸人たちによって朗吟されたいそうな人気を博していたようだ。言語的には当時のノルマンディー地方で用いられたアングロ＝ノルマン方言で書かれている。他に複数の写本、翻訳が伝わっているが、作品としての完成度でいえばオクスフォード写本に及ばない。⁽¹⁾

本稿では「ロランの歌」に現れる「怒り」を表す語彙を観察することによって、当時のフランス語における意味的差違や使い分け、さらに多義性や類義性の問題にも可能な範囲で言及してみたい。

1

まず始めにフランス語における「怒り」を表す語彙の歴史を概観してみよう。一般論として、同じ概念を表す語彙が一言語の長い歴史の中にあって全く変化しないことは、在ったとしてもむしろ稀であろう。それはいわゆる音声変化の結果ということだけでなく、言語外的要請で語彙が入れ替わることはどの言語でも頻繁に見られる現象である。社会も文化も時代によって大きく変化する

ira (m)

(iraistre → 13^e : iros, irascu → 15^e : irier, iror → 16^e)

curut

maltalent

airier

air

ばなおさらそれが自然であろう。

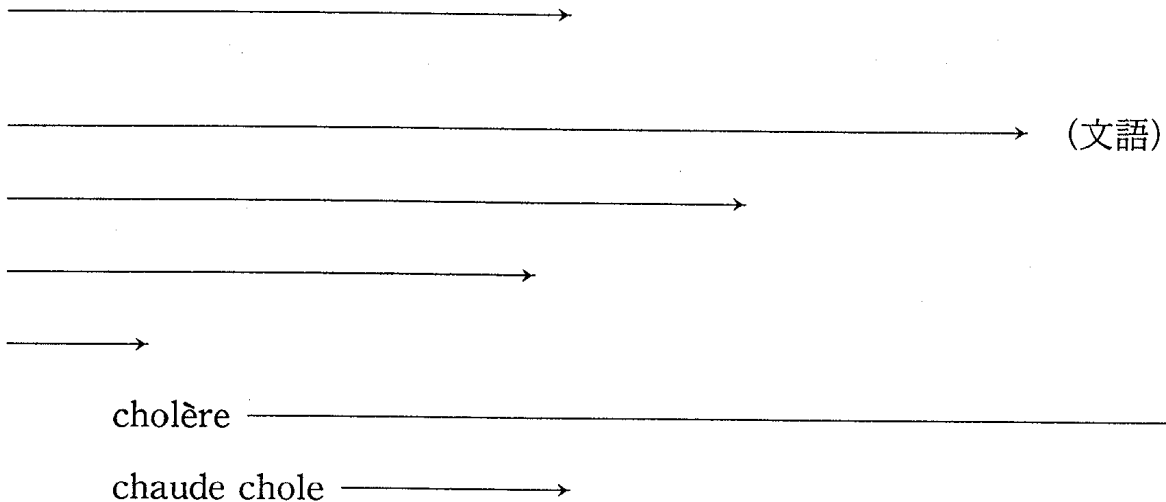
ここで取り上げる「怒り」を表す語彙についてもこのことは当てはまる。ただ、社会制度や衣服を表す語彙などに比べて、感情は時間的にも空間的にも普遍的なものであり、一旦語彙が定着してしまえば同一言語内で語彙の放棄や入れ替えをする言語外的必然性は無いように思える。ここでは語彙交替の原因というデリケートな問題は敢えて扱わないが、様々な分野の中でも感情の語彙は一種特有なものとして扱わなくてはならないのかもしれない。

フランス語の祖先であるラテン語において「怒り」を表す代表的な語彙は ira であった。古典期の哲学者セネカ (L. A. Seneca) の有名な著作「怒りについて」の原題も《De ira》である。それに対してその後二千年近くを隔てた現代フランス語における代表的対応語は colère で、この意味における ira の直接の子孫は残っていない。ラテン語を話していたローマ人も、現代のフランス人も、そして言ってみればその中間段階にある中世人たちも、怒るという感情とその対象においてはきっと大差は無いはずなのに、それを表す語彙は完全に変わってしまっている。

ira は ire という形でフランス語に持ち込まれた。ira の対格 iram の鼻音は早い段階ですでに脱落し、強勢を持たない語尾子音 a は o などと同様に「曖昧な」子音として残った。⁽²⁾ラテン語が帝国の拡張とともに中央ヨーロッパに伝播し現代のロマンス語の元が形成される過程において、多くの語彙がより長く印象の強い俗ラテン語の語彙に変わっていくことを考えると、この短い語が一表

15^e16^e17^e18^e

現代フランス語



す意味が強いだけに一層一よくそのまま存続したものだと思うが、その一方でやはり同じ意味を表す別の語が徐々に生まれてきていた。

ロランに ire に次いで高い頻度で現れるのが curut の派生語である。ラテン語 corrumpere の過去分詞 corruptus から作られた俗語動詞*corruptiare を祖とする。これが古仏語の段階で動詞 curucier になり、そこから名詞形 curut が生じた。元の動詞が「腐敗する」「変質する」を意味することから、G. Gougenheim は「怒りが心の変質と見なされたのだろう」と推測している。ロランでは形容詞形しか出てこないが、中世においてはよく使われる言葉であった。唯一中世から（文語として）現代に残った語群である。（courroux, courroucer, courroucé）

この意味で次によく使われたものに maltalent がある。⁽³⁾ talent という名詞の前に mal 「不幸」がついてできたものだが、talent 自体元々「欲望・願望」を意味していたため、この合成語が「怒り」の意味を持つようになったのは自然の成り行きであった。この時代の類語の中では珍しく純粹に怒りを表し得たので、その意味でも貴重な存在であった。後に l が母音化して mautalent という形になったが、18世紀にヴォルテールがこの意味で用いた時は既に古風な語法（archaïsme）であった。⁽⁴⁾

他に俗ラテン語の*adirare から生まれた airier 「怒らせる」、air 「怒り」がある。元の形は ira に ad- が付いたこれまた合成語であるが、この接頭辞は進行方向を示す積極的な意味合いを持つため発生当時はかなり強い感情を表していた

ものと思われる。方言により使用状況が異なり、ロランには見出すことができない。従ってここでは調査対象から外すことにする。

現代を代表する *colère* は 15-16 世紀に姿を現した。元々、胆汁 (*bile*) が引き起こす病気を意味していたこの語は最初 *cholère* と綴られ、「熱い胆汁」を意味する *chaude chole* と併用されていた。後者はその後すぐ姿を消したが、前者は綴りを変えやがて頻用されるようになっていく。16 世紀はまだ *ire* と *curut* が使われていたので、これらの古い 2 語と新しい 2 語が競合関係を続けていた。*curut* は先に述べたように使用される領域を変えて生き残ったが、*ire* の方は 17 世紀に一意図的な使用か宗教の領域を除いて一使用されなくなった。⁽⁵⁾

古仏語の時代には、これら以外にも文脈によっては怒りを表す語がいくつかあったが、ここで扱う語彙の「場」にとっては周辺的なものと見なし取り上げない。⁽⁶⁾

2.

「ロランの歌」の中に現れる「怒り」を表す語とその生起数は以下の通りである。

<i>ire</i> とその派生語 …………… 23	<i>ire</i> …………… 11
	<i>irur</i> …………… 6
	<i>irrement</i> …………… 2
	<i>irez</i> …………… 2
	<i>irance</i> …………… 1
	<i>irascut</i> …………… 1
<i>curut</i> とその派生語 …………… 4	<i>curucus</i> …………… 3
	<i>curuciez</i> …………… 1
<i>maltalent</i> …………… 3	<i>maltalant</i> …………… 2
	<i>maltalantif</i> …………… 1

先に述べたように、コーパスの写本は基本的にはアングロ＝ノルマン方言で書かれている。⁽⁷⁾各時代の各言語（これはまさにソシュールの言うところの *langue* に当たるのだろうか）に、それぞれ「怒り」を表す語彙の「場」が在るとす

れば、ここに現れた使用状況は 11-12 世紀のこの方言の語彙場(champ lexical)を表しているのだろう。この表を大雑把に見ただけでも、何が基本的な語で何がそうでないかぐらいは理解することができるだろう。

さて、我々はここで Gougenheim の提示した次の仮説の検証を試みることにしたい。⁽⁸⁾

Un fait important au point de vue de la psychologie des hommes du moyen âge est que ire et courroux (curut) ne désignent pas seulement la colère, mais aussi le chagrin. Plus exactement, ces deux notions sont si étroitement mêlées qu'il est difficile de doser chaque fois la part qui revient à chacune d'elles. (括弧・下線は筆者が補う)

上記の調査により少なくとも当該方言においては、最も基本的で標準的な語彙は ire でそれに curut が次ぐことはほぼ明らかになった。ところがこの証言によると、当時この二語は「怒り」のみならず「悲しみ」をも同時に表し、この二つの観念はこれらの語の具体的生起の中で分かちがたく結びついており、どちらがどのぐらいの割合になっているのかを言うのは困難であるという。

例えばロランの 2944 行に次のような箇所がある。

Or ad Carles grant ire. (A présent, Charles a une grande douleur.)⁽⁹⁾

シャルルマーニュが甥ロランの亡骸を見つけ涙を流すところを見て、側近のネーム公が言ったせりふである。確かに、甥を救出せんがため長い行程を大急ぎで引き返してきたばかりの時にこの悲劇に遭えば、皇帝の心はほぼ悲しみ一色で、すぐにはそれを怒りに転化する余裕はとて無かつたかもしれない。しかしだからと言って、この時皇帝の心の中に甥を殺した者に対する怒りが芽生えていなかったと断言できるだろうか。つまり作者に、芽生え始めていた怒りを表現する意図が無かつたと言えるだろうか。

同コーパス中に ire は 11 回現れるが、校訂者の J. Bédier がそれらにどのような訳語を与えているだろうか。

ire	colère	courroux	fureur	rage	angoisse
11	3	5	1	1	1

こうして見ると 11 例中 9 例は純粹な怒りを表すものと解釈されている。

Einz i frai un poi de legerie 300

Que jo n'esclair ceste meie grant *ire* 301

ここではガヌロンが、義父に当たる自分をサラセン王のもとに派遣させるようロランが提案したことに対して怒りをあらわにしている。

Quant ço veit Guenes qu'ore s'en rit Rollant, 303

Dunc ad tel doel pur poi d'*ire* ne fent ; 304

ガヌロンが潔く使者を引き受けず悪あがきをしていることに対して、ロランが高笑いをする。それに対してますますガヌロンの怒りが高じていく。

Marsilies fut esculurez de l'*ire*, 485

サラセン王マルシルのもとに使者として来たガヌロンによって伝えられる数々の屈辱に対して、怒りのあまり青ざめる (fut esculurez) 場面である。

《Carle me mandet, ki France ad en baillie, 488

Que me remembre de la dolur e de l'*ire*, 489

ガヌロンはさらにシャルルの言葉を伝える。かつてサラセン王のもとに派遣した二人の使いが、山中にて無残にも首を切られた。その時の怒りと悲しみを思い起こせと。

Jo vos ai fait alques de legerie, 513

Quant por ferir vus demustrai grant *ire*. 514

ガヌロンの言葉に対し怒ったマルシルの子息が彼を討とうと言ったことに対して、マルシルが軽はずみな怒りだったとガヌロンに赦しを請うている。

Carles li velz, a la barbe flurie, 970

美男の戦士マルガリスが王マルシルに、ロランの討伐を誓い、その暁にはシャルルが悲嘆と怒りに明け暮れることになるだろうと仮定の話をしているところである。中世においては *ire* が他の語—特にこの場合のように *doel*—と対句の形で現れることが多い(もっともこの作品ではあまり見られないが)。先ほど *ire* が「悲しみ」の意味も請け負っているという証言を挙げたが、対句の形を取り *doel* が前置されることにより、後置された *ire* の意味範囲が限定されてくる—つまりこの場合はかなり純粋な怒りを表していることになる。⁽¹⁰⁾

Ço dist Rollant : 《Por quei me portez *ire* ?》

1722

ロランの軽率さから苦戦を強いられた同胞オリヴィエが、彼に対して冷たい言葉を浴びせる。それに対してロランの発した問いである。

Quant l'emperere ad faite sa justice,

3988

E escargiez est la sue grant *ire*,

3989

裏切り者のガヌロンを処刑し、皇帝シャルルは自身の大いなる恨みを晴らした。

以上の8例は—そこに幾ばくかの悲しみが含まれていることがあったとしても—紛れもなくその主要な意味素 (*sémème*) は怒りである。

ところが残りの3例は必ずしもそうとは思えない。

Icil chevalchent fierement e a *ire*,

1920

Puis escrient l'enseigne paenime.

1921

マルシル軍のアフリカ勢が巻き返しに出る。彼らは勇猛に (*fierement*)、猛り狂ったように (*a ire*) 馬を走らせる。Bédier 訳では《avec fureur》となっているが、この語句は突進の様が猛烈であることを表現しているのであって、当人たちは特定の人物に対して怨みや怒りを抱いているのではない。*furieusement* という様態の副詞で訳し変えることも可能である。

La bataille est merveilluse e hastive.

1653

Franceis i ferent par vigur e par ire,

1654

ここでは par vigur と par ire が対句になっている。戦いにおけるフランス勢の攻撃の凄まじさを表現しているのもであって、だれかの感情を問題としているのではない。

上記二例のように、ire が特定人物の一本体なしの感情は存在し得ない感情を表さず、強い感情を表す語として様態表現に転用されている場合がある。

それにしても 2944 行の ire のように、「悲しみ」を表している例は他には見あたらない。irur 等の他の派生語についてはどうであろうか。⁽¹¹⁾

	irur	irrement	irez	irance	irascut
怒り	○○		○○		○
苛立ち	○	○○			
悲しみ	○○			○	
様態	○				
その他					

全 12 生起中怒りを表しているのが 5 例。全体的に見て、これらの語彙の基本的意味が怒りであることは察することができるが、同時に多義的 (polysémique) であることも確かだ。現代語において、「怒り」と「苛立ち」だけならともかく、それに「悲しみ」まで一つの語の中に入っていることがあり得るであろうか。⁽¹²⁾

ちなみに curut は 4 例中 3 例が怒りを表し、1 例はどちらかというが無念・悔しさを表しているように思われる。Maltalant は 3 例ともほぼ怒りの意味で用いられていると言って良いであろう。

3.

「怒りとは、自分とか自分のものが明らかに軽んぜられ、しかもその軽んぜられたことが適切でないとき、それに対して苦痛に悩んで相手に報復せんとする欲望のことである。」

これはセネカも前掲の著書の中で引用した「怒り」に関するアリストテレスの定義である。⁽¹³⁾我々は古仏語の怒りを表す語彙について考察してきたわけだが、最初に述べたようにこのような感情を表す語彙の扱いに関して未だ確たる方法論の確立を見ず、意味内容の抽象性が常に我々を不安に陥れる。そもそも怒り、悲しみ、怨み等々・・・定義およびそれぞれの領域確定が可能なのだろうか。⁽¹⁴⁾

Kleiber (1978) は諸感情を区別するための弁別意味素性 (sème distinctif) を考案する。⁽¹⁵⁾

	《Malveillance》	《Douleur》	《Emotion》
Joie	—	—	+
Colère	+	+	+
Chagrin	—	+	+
Hostilité	+	—	—
Agressivité	+	—	+
Rancune	+	+	—

音韻レベルの弁別素性に倣って、ある感情とある感情を対立させる素性を抽出し、それを敵意 (malveillance) ・心痛 (douleur) ・心の高揚 (émotion) にまとめ、有無を表記する。ここでの素性はメタ言語なので、文字どおりの意味にとってはならない。

この表を出発点として従来の類義性 (synonymie) について考えてみよう。ire, curut の具体的使用例に現れる「怒り」と「苛立ち」は、直感的に捕らえると非常に近い感じがするが、後者をこの素性表に当てはめればそれぞれの素性においてマイナスに (相対的に) 近づくことがわかる。そうならば colère と irritation は、activité-passivité という対立軸の上で捕らえることができそうだ。更にこれらの語がしばしば表す「悲しみ」という感情は、怒りと比べて「敵意」という素性だけが欠如している。他の二つの素性「心痛」「高揚」は自分の内部だけで完結しうる感情であるのに対して、敵意だけは相手 (どんなに漠然としたものでも) が無ければ成立しえない。つまり ire 系の語彙が取りうる意味の中で、怒りは上述の対立軸の上で最も左寄りにあり、具体的な生起においては、相手に対する攻撃性の大小によってそれが苛立ちになったり悲しみや苦悩として現れてくるのであろう。

中世は類義語の豊富な時代だと言われることがある。これは実は、遠く離れた時代から見ている研究者が、しばしば対象とする空間的・時間的範囲を大きく取りすぎることから来る誤解である場合がある。このささやかな研究の意義は、W. von Wartburg の次の言葉に支えられている。⁽¹⁶⁾

「古フランス語の語彙の豊富さを測るためには、一人の同じ作家の語彙を調べねばならない。その時に初めて、この時代の一人の人物の言語意識にはどんな語が共存していたのかを知り得るであろう。」

【注】

- (1) オクスフォード版以外に写本としては、14世紀にフランコ・プロヴァンサル語で書かれたヴェニス聖マルコ寺図書館本第四号、シャトールー市図書館本、パリ国民図書館本などがある。またドイツや北欧の翻訳が数編あり、古いものは12世紀前半まで遡る。(パヴァリアの僧コンラッドが訳したもので、その底本—オクスフォード写本より古い可能性がある—は、残っていない。)
- ここでコーパスとして使用したのは、*La Chanson de Roland*, publiée d'après le manuscrit d'Oxford et traduite par J. Bédier. Paris, Piazza, 1964であるが、必要に応じて L. Clédats: *La Chanson de Roland*, texte du XI^e siècle, Paris, Librairie Garnier Frères も参照した。
- (2) 現存する最古のフランス語文献とされる『ストラスブールの誓約』(842)には、兄弟を表す語 (frère) が三カ所に現れているが形は fradre と fradra に割れている。この時代には—そしてかなり後になっても—強勢を持たない語尾子音 (後に無音化) の綴りには迷いが見られる。
- (3) 綴りの不安定さは鼻母音についても同様である。talent と talant が気まぐれに交替し、この写本においても両方が見られる。
- (4) 《J'ai quelque maltalant contre M. de Malesherbes.》Gougenheim p. 127 より。
- (5) 実際、Malherbe, Corneille のような古典主義作家の作品中にも ire は見られるし、消えてしまったと言ってもロマン主義の詩人 Lamartine などは好んで使っていた。
- (6) ロラン中に現れるものとしては rage などがあるが、この語は一時的な怒りを表すと言うよりは持続的な怨みや憎悪を表すことが多いようだ。《Vos estes vifs diables. El cors vos est entree mortel rage.》(746-747) 限定詞として mortel を伴うことがまあり、現代語でも haine mortelle (激しい憎悪) という表現が残っている。
- (7) 実際にはこの作品は、言語面で言うと方言色の少ないもので、後の標準語の母胎となった

フランシアン方言に近い部分がある。

(8) p. 131.

(9) カッコ内の現代語訳は Gougenheim による。ちなみに Bédier の訳は《Grande est l'angoisse de Charles!》。ire およびその派生語が「悲しみ」の方により傾いた時、Bédier は *angoisse* を主に当てている。

(10) G. Kleiber は ire の中には現代語で言う *colère* と *douleur* の二つの意味が存在し、分析に当たってはこの二つを分けて考えるという立場を取っている。(ただし、分析の道具として当てられたこの二つの現代語は、不適切で誤解を招きやすいということを彼自身も認めている。)

彼によると *doel* と *ire* が並置される場合、普通は *doel+ire* となると言う。(彼は反対になる例も挙げているが、確かにロラン中に確認される二例—304 と 971—もそうになっている。)

こうなる理由として彼は、*ire* の多義性 (*polysémie*) を挙げる。対句で用いられた時 *ire* は怒りを意味するわけだが、*doel* を先行させることにより *ire* の持つもう一つの大きな意味である悲しみ・苦悩を予め読み手の解釈から取り除くのだという。

(11) 派生語間の関係が一様でないことは考慮に入れておくべきであろう。*irascut* は、俗ラテン語の **irascere* から (動詞の *iraistre* と共に) 来ているが、元々は *ire* と関係があるにしても直接そこから出てきたわけではない。A. J. Greimas の古仏語辞典では *ire* とは別項目になっている。

(12) *ire* の意味の二重化について W. M. Hackett が興味深い考察を行っている。《Le mot “ire” et ses dérivés, tout en gardant le sens primitif de COLERE peuvent, dès les plus anciens textes, exprimer des nuances de chagrin et de douleur.》古典ラテン語では怒りしか表さなかった *ire* が悲しみや苦悩を表すようになった理由の一つとして、類義語 *curut* の影響を挙げる。この語が物理的な意味から気分の変化を表すようになり、それがあつた時には悲しみがある時には怒りを表すことになったのだという。また、同じラテン語の *ira* から来ているイタリア語の *ira* にも明らかに苦痛や悲しみを表す例が見られるという。

(13) 出典は『弁論術』II, ii. ただしセネカは別のところから引用した可能性がある。

(14) Kleiber (1978) はこの問題について詳細な議論を展開している。ただ筆者から見ると、彼の方法はマクロな面を (つまり言語外事実を) 重視しすぎているように思われる。

また、感情そのものの研究は言語学者の領域ではない。我々は言語現象の記述にとって有用な範囲での考察に止めるべきであろう。

(15) Ibid. p. 37.

(16) p. 98. (翻訳では p. 103)

参考文献

- Bréal, M. : *Essai de sémantique*, Paris, Hachette, 1924.
- Brunot, F. : *Histoire de la langue française des origines à 1900*, Paris, A. Colin, 1905.
- Gougenheim, G. : *Les mots français dans l'histoire et dans la vie*, Paris, Picard, 1962-1966.
- Greimas, A. J. : *Dictionnaire de l'ancien français jusqu'au milieu du XIV^e siècle*, Paris, Larousse, 1968.
- *Sémantique structurale*, Paris, Larousse, 1966.
- Guiraud, P. : *L'ancien français*, Paris, Que sais-je?, 1963.
- *Structures étymologiques du lexique français*, Paris, Larousse, 1967.
- Hackett, W. M. : 《“IRE, COURROUX” et leurs dérivés en ancien français et en provençal》, *Etudes de langue et de littérature du Moyen Age offertes à Félix Lecoy*, Paris, Champion, 1973, pp. 169-180.
- Kleiber, G. : *Le mot 《ire》 en ancien français (XI-XIII^e siècle), essai d'analyse sémantique*, Paris, Klincksieck, 1978.
- Matoré, G. : *La méthode en lexicologie, domaine français*, Paris, Didier, 1953.
- Sénèque : *Dialogues. DE IRA, t. 1*, Paris, Les Belles Lettres, 1922.
- Trier, J. : *Der deutsche Wortschatz im Sinnbezirk des Verstandes*, Heidelberg, Carl Winter, 1931.
- Ullmann, S. : *Précis de sémantique française*, Berne, A. Francke, 1965.
- Wartburg, W. v. : *Evolution et structure de la langue française*, Berne, Francke, 1958. (「フランス語の進化と構造」田島宏他訳、白水社、1976)
- Zumthor, P. : 《Pour une histoire du vocabulaire français des idées》, *Zeitschrift für romanische Philologie*, 1956, t. 72, pp. 340-362.